教職を目指す後輩の皆さんへ

小川　浩　　教育・昭和６１年卒

昭和６１年４月に高松市内の中学校へ赴任し、令和５年３月まで３７年間の勤務を終えることができました。昨今は部活動の地域移行や働き方改革等、教職に関する社会の関心が高まる一方で、教員採用試験の低倍率化に見られるよう、若者の教職離れが進んでいるように感じています。今後も、教職は将来の社会の構成員である子どもを育てるという、崇高な職業であることに変わりはないと思います。教育学部で学ぶ後輩の皆さんに、子どもたちに身に付けさせてほしい能力についてお伝えしたいと思います。

それは時代背景とともに変化していく「学力観」についてです。国が次世代を担う人材に身につけてほしい能力として、「課題解決に他者と協力して取り組む力」を掲げています。様々な課題に対して他者と議論し、解決策を見いだすためには「自分の考えを表現する力」を育成しなければなりません。自分の考えを持ち、それを他人にも分かる形で表現できる能力を育むために、普段からペアやグループ活動を通して議論し、課題解決することが求められます。このような授業経営を実践するためには、指導者である教師自身が他者と協同して課題解決するという経験が必要ではないでしょうか。さらに、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大は、社会全体に甚大な影響を及ぼしました。教育現場も同様で、子どもたちは最も多感な思春期に体験したり、経験したりすべき多くのことを失いました。しかし、私自身はマイナス面ばかりであったとは思っていません。日本社会の弱点が浮き彫りとなったと言っても過言ではないと思います。正解のある問いを解き、既存の知識を蓄積してきただけの大人たちが構成する社会の脆弱さが露わになったと感じています。重複しますが、これからの社会では、正解のない課題に対して他者と議論し、解決策を見いだす能力が求められると思います。このような能力の育成は一朝一夕に成し遂げられる物ではありません。少なくとも義務教育の９年間で、発達段階に応じた教育課程を構築し、その教育課程を具現化した教育実践を継続していくことが必要だと思います。

先行き不透明で変化の激しい社会をたくましく生き抜ける子どもたちを育成するために、一人でも多くの後輩の皆さんが香川県の教職員として活躍されることを期待しています。